

◇山野井孝有の訴え

(山野井孝有「我慢できない、許せない」2012年10月17日付の冒頭部分から)

北大生・宮澤弘幸「スパイ」事件の真相を訴える

悲劇を繰り返させないために

「お父さん、私の話聞いてくれる？」——
2012年10月初旬、アメリカ在住の秋間美江子さんが千葉市の私の家に来て、こう話し始めた。お父さんとは私の事だ。
秋間さんとは、息子・泰史がコロラドで登山中に骨折した際、親身になって面倒をみていただいで以来、27年にもなるお付き合いだ。

その過程で、秋間さんの兄で北海道大学の学生だった宮澤弘幸さんが、太平洋戦争が始まった1941(昭和16)年12月8日、スパイ容疑で捕まり、戦後釈放されたが間もなく亡くなったことを知った。美江

子さんは亡くなった兄の汚名を晴らすことが出来ないかといつも話をしてきたが、その後、兄の汚名を晴らすために活動された人達が亡くなっていく中で、なかば諦めていたように私には感じられた。

秋間さんは今年86歳。乳がん、咽頭がんなどがんの手術を5回もうけた。その身体で毎年2回来日する際は、必ずわが家にも泊まる。昨年の東日本大震災の際は、ボランティアとしてアメリカ人医師20人の通訳兼世話人として1カ月も気仙沼に滞在した。まだまだ元気だと思っていた。

ところが今回、コロラド・ボルダーから十数時間のフライトを経てわが家に来た秋間さんの冒頭の一言は、これまでと雰囲気違った。私は緊張した。かみさんも特別の雰囲気を感じたようだ。

秋間さんは緊張の面持ちで語り始めた。「私も歳です。もしかすると今回が最後かも知れない」と切り出し、

「兄・弘幸の北大時代のアルバムを北海道大学に寄贈したい。一緒に行っていただけないか」と言った。

私はその一言を聞いて直感した。

「北海道大学がアルバムの寄贈を受けるならば、弘幸さんの退学処分を取り消すべきではないか」と。

秋間さんもうなずき、同意してくれた。

こうして、10月24日、私は秋間さんと一緒に北海道大学副学長に面会する。この席で、アルバムを寄贈し、宮澤弘幸さんの退学処分取り消しを求めることになった。

今また、「秘密保全法」の策動が日に日に強まっている。宮澤弘幸さんのような冤罪事件が起きる可能性が高まっているのだ。何としても「秘密保全法」は阻止しなければならぬ。

だからこそ、宮澤弘幸さんの悲劇を再確認し、名誉回復を求める秋間美江子さんの思いを叶えるために、これまで拙著「振りかえれば『波乱』」などで何回も紹介してきた71年前の悲劇について、調べた資料等を追加して、もう一度伝えたい。

宮澤弘幸さんと家族が体験した悲劇を二度と繰り返させないために——。

*本稿は、山野井孝有が宮澤・レーン・スパイ冤罪事件について書いた著作の冒頭部分。これによって多くの仲間が共感し、運動を組織化する端緒の一つとなった。隣人の悲劇を我が身に受ける思いはいまなお新鮮に訴えかける。内容の上では、本編第二部「引き裂かれた青春」に繋がっていく。